

# 令和8年度 十日町市立水沢小学校 学校経営方針

校長

## 1 基本方針

水沢小学校・馬場小学校が統合して2年目を迎える。新しい仲間、新しい環境にも慣れ、新たな気持ちで新年度をスタートする子どもたちにとって、水沢小学校で学ぶことに誇りをもち、自分や友達とのかかわりを大切にし、自分の夢や希望を実現しようとする力を育む。

また、学校は「安心」「安全」に過ごし、学ぶ場所であることを全児童・保護者・地域そして全教職員に周知、共通理解を図り、教育活動を推進する。その上で、「確かな学力、豊かな心、健康な体」の育成に向け、教育課程を見直し、編成することで、全教職員が組織的に教育活動に取り組み、質の高い教育の実現につなげる。

## 2 教育目標

<b>教育基本法</b> ・人格の形成 ・自主自律 ・幅広い知識・教養 ・伝統文化の尊重 等	<b>水沢小学校教育目標</b> <b>明るく やさしく たくましく</b>  <b>重点目標</b> <b>人やものとの豊かなかかわりの 中で、自分のよさや力を発揮する 子ども</b>	<b>新潟県学校教育の重点</b> 今後目指すひとつづくりの姿 ふるさとへの愛と誇りを胸に、夢や希望 を持って粘り強く挑戦し、未来を創る ことができる人
<b>学習指導要領</b> ・主体的・対話的で深い学び ・カリキュラムマネジメント ・家庭、地域との連携と協働		<b>十日町市学校教育のめあて</b> ふるさとに遊ぶ。共に生きる。 自ら創る。
将来の変化を予測が困難な時代の中 で、自らの人生を切り拓き、自らの生 涯を生き抜く力を培う。		<b>水沢中学校区目指す子どもの姿</b> 自信をもって行動できる子ども ～自己有用感を育む教育の推進を通して～

### 目指す子どもの姿

学び方を身に付け、意欲的に学習しようとする。 友達や周りの人と進んでかかわろうとする。進んで体を動かし、健康的に過ごそうとする。

## 何事にも失敗を恐れず、チャレンジする水沢小学校の子ども達

### 子どもに付けたい力

- (低学年) 自分のことは自分でできる。友達と仲良くできる。 ⇒自己肯定感をアップ
- (中学年) 学級のことを自分たちでできる。友達の良さを認め協力できる。 ⇒人間関係形成力アップ
- (高学年) 学校全体のことを考え、行動できる。 ⇒自治的活動力アップ

## 3 教育目標達成のために

### ○チーム水沢小

- ・教職員一人一人の持ち味を生かす。
- ・全教職員で全校の子どもを見取る。
- ・常に安全に配慮し、子どもたちが安心して生活を送ることのできる環境を、全職員で整える。

### ○子どもの実態を考慮した授業

- ・授業の中で、学力向上、生徒指導、社会性の育成を行う。
- ・日々の授業の充実、基礎学力の定着、担当する学年での学習事項はしっかり押さえる。
- ・全ての子どもが「もっと知りたい」「もっとやってみたい」と思う授業の実現を目指す。  
→どの子どもにも分かる喜び、できた達成感を味わわせる。=「やればできる」(馬場小校訓)
- ・「汎愛村校」として馬場小学校を開校した、154年前の先人の思いの継承。

※旧馬場小学校の校訓「やればできる」、開校当時の理念「汎愛」については、水沢小学校でも継承する。学校だより、校長講話等で紹介。経営方針最後に記載。

## ○仕事術、多忙感の解消

- ・組織としての学校。「報告、連絡、相談、確認」は躊躇せず。的確な職務の遂行を心掛ける。
- ・目の前の活動が何のためのものかを意識する。「目的の明確化」

## ○職員集団として

- ・学校は「安心・安全の場」でなくてはならない。いじめ・不登校など心にかかわる問題は、細心の注意を払い、チームとして迅速に対応する。(未然防止と初期対応)
- ・危険個所、安全管理にも細心の注意を払う。物の管理も大丈夫か？  
※頸から上のけがにも注意する。命のかかわる事故は何をおいても最優先にする。
- ・学び続ける教師集団を目指す。様々なことにまず教師が興味をもつ。まずは教師が「やってみる」
- ・何より教職員が心身ともに健康であることが大切である。子どもにとって、担任が生き生きしていることが何より大事(子どもは最も身近な存在である、我々大人をよく見ている。我々は子どもたちからよく見られている)

※非違行為防止：非違行為はすべてを失ってしまう。(子ども、保護者、地域からの信頼。そして家族) 教師との信頼関係が崩れるのは当然。信頼関係のないところに教育は成立しない。

- ・一人の人間として  
→息抜き、ストレス解消、趣味など、自分自身の時間を大切にすること。  
各人に、親の介護、子どもの受験、入学、就職…いろいろな課題はあるのも事実。心配事はどんどん相談し、一人で抱え込まない。

## ○地域とともにあり地域の中にある学校

- 社会に開かれた教育課程。学校と保護者・地域が協働して子どもを育てる。
- ・保護者との関わり方：保護者にとっては自分の子どもはかけがえのない存在であることを忘れない。
- ・保護者へは、まず子どものよいところ、成長を折に触れて伝える。子どもに寄り添っている姿を見せ、保護者の信頼を得る。
- ・学校運営協議会CSとの連携 地域人材の活用・発掘→学校支援地域コーディネーターとの連携
- ・シューレ(たかき医院内)→不登校、不応児童対応。⇒市教委とも連携。

## ※合言葉「やればできる」について

旧馬場小学校正門わき設置看板の揮毫 元馬場小校長(第8代) 星名武男先生(令和7年3月ご逝去)

子どもたちの大好きな「やればできる」。しかし、安易に合言葉に頼って、努力を怠ってはいないだろうか。実際にやってみることで、達成できる可能性が広がることは確かだが、「やればできる」と唱える(精神論)だけでは、「できる」可能性は低い。スタートの動機付けとしての「やればできる」から、「できた」につなげるために、次のことに取り組む。

- ① 子どもたちの意欲を育て、見通す力(計画力)を養い、行動力を育てる。「できる」ようになるためのスキルを習得させる。目的、目標、方法を明確にする。学習における「自己調整力」を身につけさせる。
- ② うまくいかない時の対処法(レジリエンス)を知る。レジリエンス：落ち込んで立ち直る力。失敗した時や人に助けられた時にも育てることができる。成功しなくても成長していることに気づかせる。
- ③ 根気強く取り組むことも大切。

ある意味、耐性を育てるタイミングを見逃さない。できるまでやり続ける根気強さ。

やる前から「ぼくにはできません」と聞くことがある。できませんと言っている限りは、まずできない。子どもに「やってみよう。できるかも。この機会を生かして頑張ればできるかも」と思わせ取り組ませて、適切な支援を行うことで「できた」という経験を積ませる。それが重点目標にある「～自分の夢や希望を実現しようとする子ども」を育てることにつながる。

## 汎愛村校の精神：汎愛＝全てに差別なく、博く愛すること。

明治4年、馬場村の庄屋である富井邦彦氏は、この地に学校を設立しようと、支援者の協力を得て、自費をもって学校を設立した。(米百俵で有名な小林虎三郎もこの地に来たことがある。その影響もあったか?) 当初の校名は「汎愛村校」。これが馬場小学校の前身とされる。明治の学制発布より1年早く学校ができたということで、馬場小学校は市内で一番古い学校とされる。令和3年度＝創立150周年、令和4年度＝記念式典挙行。(因みに、小千谷小学校は学制発布の10年前にできたとされる。つまり日本一古い公立小学校。)

汎愛村校の精神は即ち、全ての子どもに学習の権利と教育活動に参加する機会を保障することである。